（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

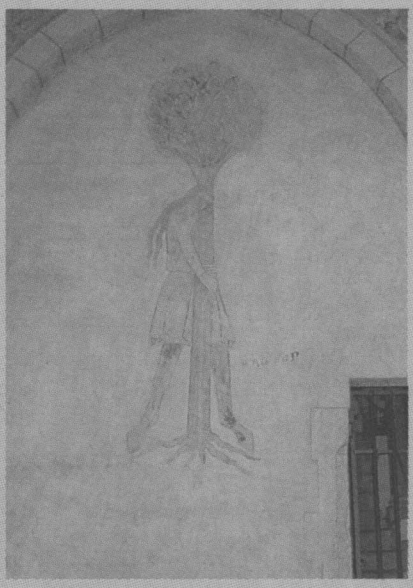
良い教材

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　7

私が担当している授業では今まで一度も教科書を使ったことがないが、その代わりに毎回の授業に必ずプリントを用意する。専門書や新聞記事からの引用に加え、必ずその内容に関連がある4コマ漫画（ほとんどが英語）を載せるが、履修している学生はそれを楽しみにしているようである。

「百聞は一見に如かず」、や〝A picture is worth a thousand words〟が言っているように、言葉だけに頼る教育は無駄が多い営みになる。「絵本地獄」（風濤社、1980年）がロングセラーになっていることは納得がいく。

言うまでもなく、お寺や教会にある絵で地獄を描いているものはかなり少ない。何回見ても飽きない、見ている度に親しみが深くなる絵こそ生涯の友となる。私にとってこのような絵の一つは生まれた町の大聖堂にあった。旧約聖書の人物であるサムソンが、大きな木を根っこから引き抜いているシーンであろうことなど何も知らなかった私であったが、それは私は「何となく」好きな絵であった。



リンブルク大聖堂の壁画

素晴らしい絵画から学ぶ

ずいぶん時間が経ってからいろいろと分かった。この絵は教会の建築当初からの壁画で、中世の芸術を代表するものの一つであるが、丁寧に修復され、今でも鮮やかな印象を与えている。聖書の写本は非常に貴重なものであり、当時のドイツの識字率は低く、庶民の宗教教育に大事な役割を担っていたのが聖堂内の壁画であった。小学校の低学年であった私にとっても非常に良い教材になっていた。

ちなみに、このリンブルク大聖堂自身の絵にもよく知られているものがあった。ヨーロッパの統一通貨のユーロの将来は毎日のように新聞やテレビで取り上げられ、議論されているが、ユーロ時代の前のドイツマルクの紙幣には様々な歴史的な建物が印刷されていた。当時最高額紙幣であった1000マルクを飾ったのはリンブルク大聖堂のイラストであった。このような金額のお金と全く関係ない生活をしていた私は、故郷の教会がイラストとして使われていたことを少しだけ誇りに思っていたが、疑問も抱いていた。紙幣に載っている絵と、お金が語っている言葉にはかなりのズレがあるのではないだろうか。